
探偵論

武中略介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵論

【ZZマーク】

ZZ9576ZZ

【作者名】

武中略介

【あらすじ】

探偵とはなんぞや。
武中なりの表現です。

(前書き)

『前口上』

この短編は既存の推理小説、探偵小説、捕物帖とづねやミステリや伝奇小説を否定するものではなく、むしろ肯定するものだといえます。結局のところ、分類ジャンルというものは本を棚並べしやすくするためのわかりやすい指標ラベルでしかないと思つからです。

さて、このお話には二人のキャラクターが出てきます。

ひとりは【女】あるいは【先輩】。このキャラクターは女性ですが、大学生なのか高校生なのか、はたまた中学生か小学生かあるいは、幼稚園児かもしません。そんな曖昧な認識で結構でござります。

しかし、この【女】は物語における狂言廻し的存在であると言えましよう。

主人公ではありませんが（そもそもこの物語に確固とした主人公像はありません）、それに準じる立ち位置にあると断じます。

もうひとりは【少年】。このキャラクターは男性です。【女】と同じく、どういった年齢のどういった経歴の人間かは曖昧ですが、しかし、【女】より年下であることだけは確かな事実として明記しておきましょう。

このキャラクターも決して主人公ではありません。

そして、【少年】もまた【女】と同じく狂言廻し的存在であります。

最後に、この短編を読んで得るものがあるかということですが、あらゆる書物にはなにか得るものがあるといつ觀点から見ればあるのかもしれません、しかし作者としては、ないだろりと言つておきましょ。う。

この短編はひどく退廃的であり、また、起承転結もなければオチもありません。

いわば、手慰みのようなものであります。
それでもよろしければ本文へお進みください。

女が先輩、先輩と呼ぶ声に振り返ると、そこにいたのはひとりの少年であった。

「どうしたんだい？」

女は問うた。

「私は今、見てもらえばわかるように読書中なのだけれど」

少年は言つた。

「ええと、なんと言いますか……。特になにか用があつたわけではありませんません、図書館に先輩がいるのを見て声をかけた次第で……。なにぶん、少々暇でして」

少し申し訳なさそうに、少年はうつむいた。

女はくすくすと笑つた。

「構わないよ、私もそこまでこの本に思い入れがあるわけではないからね。どれ、向こうに座りたまえ。少し話をしようじゃないか」
女も女で、暇を持て余していたようだ。

少年は女の向かいに座ると、女の持つ本に目をやつた。英語で書かれた本だった。

「それ、シャーロック＝ホームズですよね。『A Study in
n Scarlet』だから……。一作目の『緋色の研究』」

「そう。アーサー＝コナン＝ドイルのホームズだ。君は読んだことあるのかな？ 原文でも新潮文庫の和訳版でも構わないけれど」
ぱたん、と本を閉じる。栄は挿まなかつた。

少年はしばし考え込むと、

「……確か、『最後の事件』までは読んだかと。原文で読んだのは一作目の『四つの署名』だけですね」

「そうか。……それで、どう思つた？」

「どうつて……」

言ひ淀む。

「シャーロック＝ホームズ然としていると、そひ、僕は思いましたけれど」

「そうだ。 そなたよ、少年。 シャーロック＝ホームズはとてもよくできた、推理小説の奔りとして知られているけれど、実際問題、現代の若者がこの小説で満足できるかといわれれば、私にはそう思えない。もちろん、面白いものではあるけれど」

女は舌の先を彷徨わせた。

「 そうだな、なんというか、当たり前なんだ」

少年はくすりと笑つた。

「そりやあそうでしよう。 シャーロック＝ホームズは当たり前のことをして当たり前のように犯人を見つけるのがスタンスですから」

「それがホームズというわけだね」

女は興味深げに自分の持つ英書を眺める。

「しかしだね。 この本が出た時代では、それは当たり前のことではなかつたんだ。だから売れた」

「売れすぎて、ドイル本人にまで探偵の依頼がきたとかいう逸話もありますね」

実話である。

ドイルは困惑し、『自分は医者であるが探偵ではない』と返した
そうだ。

「現代では、ホームズがやることは全て もしかしたら、それ以上に警察がやつていいだろうね。格好や背丈や、そういうしたものから人物像を割り出すプロファイリング担当官もいるし、彼が這いつくばつて探し出した科学的ヒントなんかよりももつと正確な『証拠』というやつを、鑑識は探し出すことができるわけだ」

女は続ける。

「だから、すでにホームズ型の探偵は成立しない。彼のやることは全て、警察機関がやるからね。だから、昨今の探偵が出てくる物語には違う視点が必要なのだ」

少年は首をかしげた。

「違う視点、ですか……？」

「そう。例えば、『クローズドサークル』のようなね」

「……というと、『嵐の孤島』や『雪山の洋館』ですか。なるほど、確かにこれらなら警察の手は伸びませんね」

確かに心したように、頷く。

「そうだ。そのようにして、警察という発達しそぎた機関を取り除かなければホームズ式の探偵物語は成立しない」

時代をずらしたり、環境をずらしたりしてね」と女は続けた。
「ですが、先輩。現代において評価されているミステリは、どちらかというとライトで軽快な部類 安楽椅子探偵などですよね。つまり、なにが言いたいかというと ホームズ式の探偵物語を成立するような時代背景、舞台設計をしたとしても、現代においては『努力』は好まれない傾向にあるのではないか」

反論。

「それは当然だ。なんせ、現代人は努力が嫌いなんだから。努力が嫌いだから暇なんてできるし、こんな実のない会話に花を咲かせられるわけだけれど」

「ですね」

「だが実際、」

女は言つ。

「こういう混沌とした題材となってしまった『探偵物語』だけれどそもそも、探偵とはなんなんだろうね」

問いかける。

少年は、またしばし考え込む。
ややあつて、口を開いた。

「……理想、ではないでしょうか」

「ほう?」

続きを促す。

「実際の探偵がどういうものか、なんてこと、だれしもが知っているわけじゃないですか。実際に殺人を解決する探偵なんていない、

いるのは浮氣調査するのがせいぜいで、たまにテレビに出ても防犯豆知識くらいしか言わない企業としての探偵なわけです」

女は、なるほど、と唸つた。

「つまり、君が言いたいのは『探偵とは現実のものではなく、理想や夢想として在るものだ』と、そういうことだね？ 現実の探偵なんてのは、犬の餌にもならないものだ、と」

「そこまでは言いませんが ですが、ああいつのは探偵は探偵でもみんなが求めている探偵ではないでしょうね。世間が求める探偵は娛樂である、ということです」

「娛樂である、か。言い得て妙だね。だが それは、ひいては現実世界の否定になるのではないか？」

「そりやあそうでしょう」

両手のひらを上に向け、首をすくめるよじにして少年はおどけた。
「現実世界において、スリリングでサスペンスな物語なんてそういうあるものではありませんから。日本においては警察や検察といった機関が事件が起こる前も起こった後も目を光らせているわけです。そんなところで事件がおきてもつまらない。すぐ解決してしまうのは目に見えています。だから、現実世界を否定して創造世界に探偵を求めるんです。『探偵は実在しない』

「実在、か。正確には『求める探偵がない』と言つべきか 面白い答えだね」

女は笑つた。

「けれど、今、私が論じたいのはそういうふた求められていないうほどの探偵も含めた、いわば言葉の意味そのものだよ」

英書を鞄にしまい、女は立ち上がる。

「来るかい？」

「どこに、とは聞かない。だが、問うところひとつ少年がついて来ても問題のない場所に行くということだ。」

「行きます」

少年は応えた。

よつするに、未だに一人とも暇なのだ。

図書館を出て、ぶらぶらと歩く。目的地など、最初からありはしなかった。

川沿いの遊歩道をしばらく行くと、一人はひとりの男があたりに鋭い眼光をまきながらひたすらしているのと出会った。

女が、

「なにをしているんですか」

と問うと、男はハッとしてちらりと『氣付いて』『氣恥ずかしげに』、

「仕事を……」

と小さく呟いた。そして、

「あの、じついう猫を見ませんでしたか」と猫の写真を一人に見せた。

肥え太った、少々不細工だが愛嬌のある顔立ちをしている。

「いえ、僕は……先輩はどうですか?」

「見てないですね。……あなたは探偵業者ですか?」

「はあ」

男はさらに恐縮した。

「お恥ずかしながら……」

では、私はコレで。と男は去っていった。猫を探しにいったのだろつ。

女と少年は、しばし顔を見合せると同時に吹き出した。
「どうして『お恥ずかしい』んだろうね、自分の仕事なんだから誇りを持てばいいのに」

「それはたぶん、自分が『世間一般が憧れる探偵ではない』仕事をしていたからではないでしょうか。全ての探偵が今の方のようではないと思いますが……」

「なんだか興ざめだな」

女は言つ。

「私の求める答えは、わりとどうでもいいかもしないな。探偵とはなんぞや、なんてね」

少年は言つ。

「僕はわかりましたよ。探偵とはなんぞや
くすくすと、まだおさまらない笑いとともに」。

「たぶん、探偵は探偵としか言いようがないんですねよ」

(後書き)

僕にとっての探偵は、おそらく詐欺師と同義でしょう。

事件を解決するのではなく、『オリエント特急殺人事件』のよう

に”物語を解決する”わけです。

それに、推理という行為が付随しているものがあれば、僕の好みに限りなく合致します。

つまり、このお話はどこままでいっても僕の好みであった、ということです。

2011・12・29 投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9576z/>

探偵論

2011年12月29日22時48分発行